「教員養成セミナー　」2003 年 10 月号に掲載

Book　Review　　RE　Learning　秦野　玲子

『空の名前』高橋健司写真・文　角川書店　1999 年

『おとなになる本』パット・パルマー原作　eqPress 編訳　径書房　1994 年

近頃、立ち止まって空を見上げ雲の形が何かに似ているな、なんて思う時間を持ちましたか？

おとなになると目的地につくまでの間に、空を見上げたりしゃがみこんで道端の花を見たり、赤くなり始めた木の実を触ってみたり、空が少しずつ色を変えていくのを見ていたり…　そんなことをしなくなってしまうのは何故なのでしょうね。いつのまにか目的地に最短の距離、時間で着くことの方に価値があると思うようになっているのでしょうか。でも、自分のまわりすべてが「ただの風景」であるよりも風や雨や雲の名前を色々と知っていると心が少し豊かになるように思います。

そこで開くのが『空の名前』。美しい写真と季節や空気を表す美しい言葉が並ぶこの本を開いたあとには、いつもの景色が親しげなやさしい顔を見せてくれるように思えます。心が疲れてしまった時にはなおさらです。

小さな子どもだった頃には「心が疲れる」なんて言葉とは無縁だったのに、おとなになるにつれて、ありのままの自分を好きでいることが難しくなってしまう時があります。私の夢はなんだったのかな、私の選んだ道は本当に望んでいたものかな、なんてまるで人生の迷子になってしまったような･･･。

そんな時に開くのは『おとなになる本』。いまさら？とお思いでしょうか。確かにこの本はアメリカの１０代のために書かれたものです。けれど、発達段階としての成人になってもいきなり「おとな」になれる訳ではありません。例えば「人の気持ちを理解できる」「自制心がある」というような、プラスの価値を持った「おとな」になることは、年齢とは関係なく難しいこともあります。この本に書かれている「自分を大切にすること」Self-direction（自己決定）の大切さがわかり、多様な自己を表現できる社会を創る一員であるということを思い起こすなるということはひとそれぞれのペースがあるのだと思います。

ただ、未来を担う子どもたちに「おとなになるってなんだか素敵そう」と憧れてもらえること、それが「おとな」であることの責任なのかもしれません。

想像の世界で遊ぶことも忘れ「合理性に囚われて夢の持てない存在」という、マイナスの価値を帯びた「おとな」では、子どもたちの素敵なモデルでありえない。だから、少しつらいことがあった時も「私は私でしかない」と等身大の自分を確認したり、「自然とともにある自分」を余裕をもって楽しめる「おとな」でありたい。そんなあたりまえのことを思い出して「また明日からいい日にしよう！」と笑顔になるために、この２冊は私にとって大切な本なのです。